

タッチタイピング習熟度向上のための指導法

濱 口 な ぎ さ

Teaching methods for improving students' touch-typing proficiency

Nagisa HAMAGUCHI

キーワード：タッチタイピング、能動的学習、学習意欲、達成感

1. はじめに

筆者が所属しているビジネス・医療秘書コース（以下本コースと記述）の卒業生は、例年約8割が事務職として就職しているが、現代社会においては事務職以外の職種であっても、パソコンを使いこなせるスキル（以下PCスキルと表記）は必須であると考ええる。

本コースでは、「総合ビジネス」分野としてWordやExcel、PowerPoint等のアプリケーションの基礎から応用までを学び、事務職に限らず社会人にとって必要なPCスキルを習得することを目的とした科目群を編成している。

一方で、本コースに入学してくる学生たちは、普通科、商業系の学科、家政科や総合学科出身者など様々で、入学時点での基礎的なPCスキルのレベルには差がある。

三好・小堺(2020)は、コンピュータリテラシー教育とタイピング練習がタイピング速度向上に及ぼす影響を研究しており、「タイピング練習を行っていなくても、コンピュータリテラシー教育がタイピング速度の向上に一役買っていることを認めることができた。さらに、タイピング練習を継続して行うことによりさらなるタイピング速度の向上を認めることが分かった。」と述べている。この研究でのコンピュータリテラシー教育とは、パソコンの基本操作、日本語ワープロ、プレゼンテーションソフト、表計算ソフトのことであり、本コースのカリキュラム内容とも一致する。

2021年から続く新型コロナウイルス蔓延の影響で、リモート授業やリモートワークが日常となった現在では、タッチタイピングの習得によるメリットは増大していると考ええる。タッチタイピングの習熟度を上げておけば、短大在学中はもちろんのこと、就職後においても作業効率の向上や時短につながり、余裕をもって仕事に取り組むことが可能となり、仕事の質の向上も期待できる。

本稿では、「ビジネス文書作成1」で行ったタッチタイピング習熟度向上のための指導法と、1年次後期に開講している「ビジネス文書作成2」で確認したスキルチェックの結果について報告する。

2. クラス分けの方法

本コースでは、1年次前期に開講している「ビジネス文書作成1」にて、PCスキルの中でも特に基礎的なスキルであるタッチタイピングの習熟度向上を目指している。この授業では、毎年各学生のレベルに合わせて初心者と経験者にクラス分けを行い、タッチタイピングの習得と習熟度向上に重点を置いた課題設定を行い、授業を展開している。

「ビジネス文書作成1」では、初回と第2回にクラス分けのための確認を行い、第3回目から初心者と経験者にクラスを分けて授業を行っている。

クラス分けは、①アンケート調査、②e-typingを使用した実技によるレベルチェック、③高校時の取得検定、④本人の意向確認、以上4つの指標

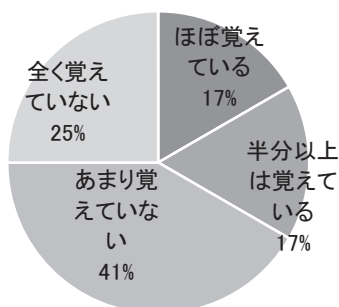
に基づいて行っている。

「①アンケート調査」は、初回授業時に行い、下記8つの項目について短大入学前までの経験等について調査している。

- | |
|--------------------------|
| (1) パソコンのキーボードの位置について |
| (2) パソコンで入力するときキーボードを見るか |
| (3) 使用したことのある文書作成ソフトについて |
| (4) ビジネス文書の作成について |
| (5) パソコンでの表の作成について |
| (6) パソコンでの図形の作成について |
| (7) 全商ビジネス文書実務検定試験の取得級 |
| (8) 日商 PC 検定の取得級 |

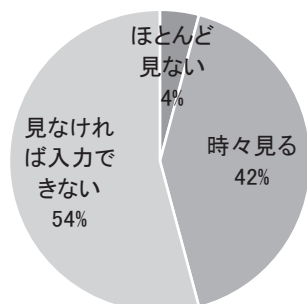
これら8つの項目の中で、タッチタイピング習得状況が確認できる質問が(1)と(2)である。

令和3年度入学生(21L)24名に実施したアンケート結果は、図表1・図表2のとおりであった。



図表1 キーボードの位置について

図表1で示したように、キーボードの位置を「あまり覚えていない(10名)」「全く覚えていない(6名)」学生が66%と半数以上を占めている。このことから、短大入学までの期間、タッチタイピングを学ぶ機会がなかった学生が2/3程度いることが推測される。



図表2 入力する時キーボードを見るか

また、図表2では「見なければ入力できない(13名)」が54%となっている。ほとんどの学生は、小・中・高校での授業において、何らかの形でパソコンを使い、キーボードから入力した経験はあると思われる。明確な位置は覚えていなくとも、大まかな場所は把握できている場合もあると思われるが、このアンケート調査の内容では評価はできなかった。

「②e-typingを使用した実技によるレベルチェック」は、イータイピング株式会社がネット上で公開しているタイピング練習用サイトを活用したレベルチェックである。このサイトでは無料の会員登録をすることで、キーボード位置を覚えるためのアルファベットの基礎練習から、ローマ字入力による長文練習などの応用練習を行うことができる。

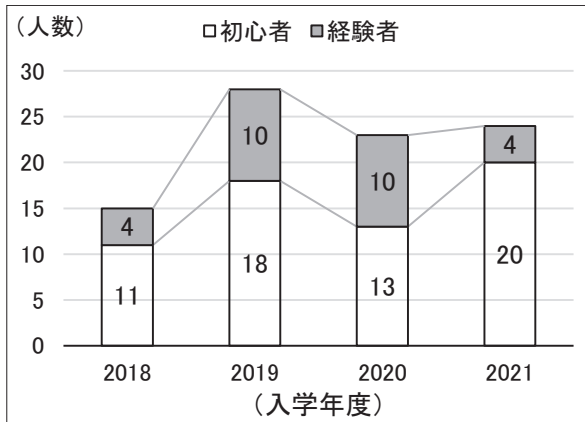
初回授業時後半から第2回にかけて、学生はe-typingのサイトから自分のレベルにあった問題を選択して入力練習を行い、各自でタッチタイピングの習得状況を確認する。

クラス分けの基準を、「ホームポジションを起点として指を動かし、各キーの位置を『ほぼ覚えている』状態で、『時々キーボードを見る』かもしれないが、入力が正確にできること」とし、この基準を満たした学生を経験者クラスに配属している。

今年度は第2回目の授業の後半に、上記①②の状況と「③高校時代の取得検定」も参考にしながら、学生の意向を尊重したクラス分けを行った。筆者の判断では経験者クラスが適当と思われる学生が、初心者クラスを希望する場合がある。この理由として、実力はあるのに経験者クラスでやっていく自信がない場合と、友人と同じクラスになりたいため初心者クラスを希望する場合の2つがある。本人が望まないクラスで授業を受けることが、学習意欲の減退を招く可能性を考え、学生の意向を尊重することになっている。

今年度の入学生24名は、経験者クラス4名、初心者クラス20名に分かれた。なお、初心者クラスのうち2名は、実力はあるにもかかわらず自信が持てず初心者クラスで学びたいと希望した学生で

ある。参考までに過去4年間の経験者クラスと初心者クラスの人気割合を図表3に示す。



図表3 初心者クラスと経験者クラスの割合

マーケティングの世界では、ネオ・デジタル・ネイティブと呼ばれるように、インターネットやコンピュータが生まれた時から当たり前にある生活を送ってきた世代の学生たちである。年々経験者クラスの数が増加するのではないかと考えていたが、図表3の推移を見ても分かるように、初心者クラスの方が多い状態が継続しており、本学入学時点でのタッチタイピングの習熟度について、大きな変化は見られない。

3. 課題設定

第3回目から「ビジネス文書作成1」はクラス別で授業を実施している。この授業の主題は「ビジネス文書を作成するために必要な基本的な知識と、Wordを使用した作成方法の習得」であるが、スムーズな日本語入力ができること前提となる。

そのためには、タッチタイピングのスキルが一定レベルに達していることが必要となるが、その習得に長い時間をかけることはできない。少なくとも5月中には、初心者クラスの学生たちが、授業に必要なタッチタイピングのスキルを習得する事を目指し、各自が目標を持って取り組むことができ、かつ各クラス共通で使用できる教材として2種類を使用した(図表4・図表5)。

練習の記録は厚手の紙に印刷して配布し、学生には空き時間等を利用して練習を行うよう指導した。ポイントごとに実施するミニテストの結果は、

必ず筆者が確認してスタンプを押す方法を取り、各学生の練習の進捗状況が一目でわかるようにした。

随時正しいホームポジションへの戻り方、姿勢、視線の使い方を指導し、ミニテスト実施後の結果に対する評価とアドバイスをきめ細かく行うことを心がけた。

ゲーム感覚で練習ができることで学習意欲が湧き、ミニテストに合格するとスタンプを押していく形式にしたことで目標が明確となり、達成感も味わえるためか、熱心に取り組む学生が多かった。

図表4の基礎練習は、合格ラインを正確率100%として、キーボードの位置を正確に覚えることに重点を置いた。次の基本練習では、正確率98%以上を合格ラインに定めて1~2文字のミスは許容範囲とし、スムーズなローマ字入力のスキルを身に付けることに重点を置いた。

図表5の応用練習では、短文や長文の入力練習を行い、最後の腕試しレベルチェックでタッチタイピングがどの程度身に付いたかを確認した。な

練習項目	達成率	達成率	達成率	達成率	達成率	達成率	達成率
練習1	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
練習2	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

図表4 練習の記録 (基礎・基本)

練習項目	達成率	達成率	達成率	達成率	達成率	達成率	達成率
練習1	%	%	%	%	%	%	%
練習2	%	%	%	%	%	%	%

図表5 練習の記録 (応用)

お、e-typing ではローマ字入力 of 練習はできるが、日本語入力（かな漢字変換等）はできないため、タッチタイピングでの入力スキル向上のみを図ることとなる。

3.1. 目標設定

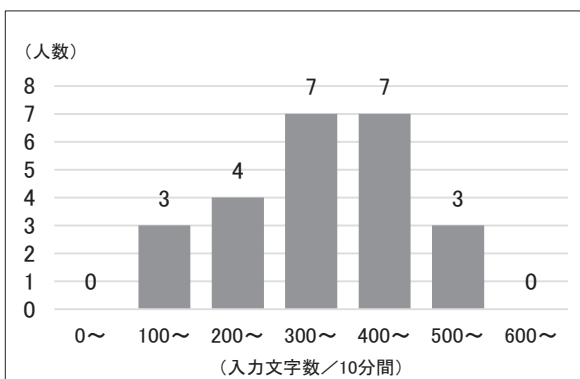
今年度の初心者クラスは図表5の応用練習を5月21日までに終了することと定めた。なお、経験者クラスは、初心者クラスより約1か月短い4月28日までに終了することとした。

これに並行し、授業では効率の良い日本語入力（かな漢字変換等）の方法について指導した後、教科書に掲載されている約6,000字の長文入力の課題を与えた。

経験者クラスの学生については、4月28日と6月2日の2回入力テストを実施し、10分間で450字以上入力することを目標とした。

また、初心者クラスは、上記の課題をすべて終了した6月29日に入力テストを実施し、入力速度より正確性を重視し、10分間で300字以上の入力を目標とした。

6月に実施した入力テストの結果は図表6のとおりである。



図表6 入力テスト結果 (n=24)

初心者クラス (20名)、経験者クラス (4名) とも同じ問題を使用した。このうち経験者クラス4名の入力文字数は、265字、448字、524字、534字であった。また、初心者クラスの学生のうち75% (15名) が300字超入力できていた。

正確率については、経験者クラスは入力ミスなしの100%が1名、初心者クラスは11名が100%で

あった。残りの12名のうち11名が正確率は99%以上で、1名が問題文を1行読み違えたことにより87%となっていた。

4. 結果と考察

第14回目の授業時 (7月) に「ビジネス文書作成1で学んだ技能の習熟度チェック」を行った。

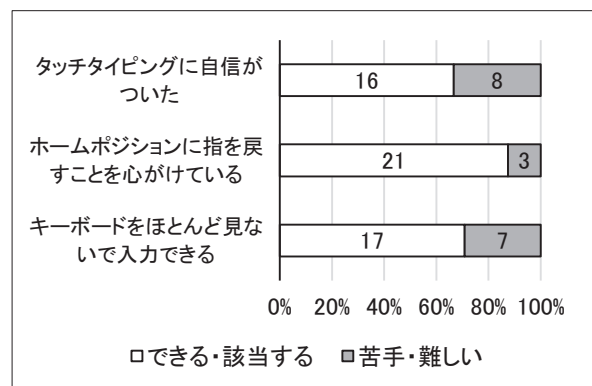
学生たちには Word の技能 (ページ設定、保存、文字書式、段落書式、表作成) とタイピングについて自己評価をしてもらった。タイピングに関する項目の評価結果は図表7のとおりである。

図表1のグラフで示したように、4月の時点では、キーボードをほとんど見ないで入力できると答えた学生は1名であったが、7月には17名と約70%の学生ができるようになったと評価している。また、タイピングに自信がついたと答えた学生も70%近くとなっており、最初の2ヶ月に集中的にタッチタイピングのスキル習得の課題に取り組んだ結果がこのような自己評価につながっていると思われる。

また、学生たちが就活準備のために作成した自己紹介書に、タイピングを特技や身に付いたこととして記載している学生が5名おり、うち4名が初心者クラスであった。

甲賀・大内 (2017) は、「夏季休業のブランクを挟むと速度が急激に落ち込むため、前期に得られた成果を取り戻すためにも、後期以降も練習を継続していくことが不可欠と考える。」と述べている。

本コースでは、1年後期以降の授業でタッチタイピングの練習は行っていないが、筆者が担当す



図表7 タイピングに関する自己評価 (n=24)

る科目や検定対策講座において、自主的に入力練習を行うよう働きかけている。

また、三好・小堺（2020）の「コンピュータリテラシー教育がタイピング速度の向上に一役買っていることを認めることができた」と述べていることにも着目し、本コースで開講している他の科目での学びの成果に期待し、1年次後期に開講している「ビジネス文書作成2」にて、12月に入力テストを実施した。その結果が図表8である。図表6のグラフと比較すると、全体的に入力文字数は増加しており、タッチタイピングの習熟度が上がっていることがわかる。

しかし、この結果に関する学生による自己評価は、「納得していない」が74%（17名）であり、その理由は「練習をしていなかった」47%（8名）、「漢字が読めなかった」29%（5名）、「キーボードを見ている」24%（4名）であった。学生たちが、理想とする入力文字数の平均値は、500文字以上と回答していることから、さらにタッチタイピングの習熟度を上げたいと意欲を持っていることを推察できる。この意欲の継続をはかるためにも、定期的な入力テストを実施することが効果的ではないかと感じた。

一方で、「漢字が読めなかった」と回答した学生がいたことは、見逃せない事実である。

日商 PC 検定や秘書検定等の検定対策を行い、模擬問題に取り組みせると、「問題の意味が理解できなかった」と答える学生が一定数存在する。

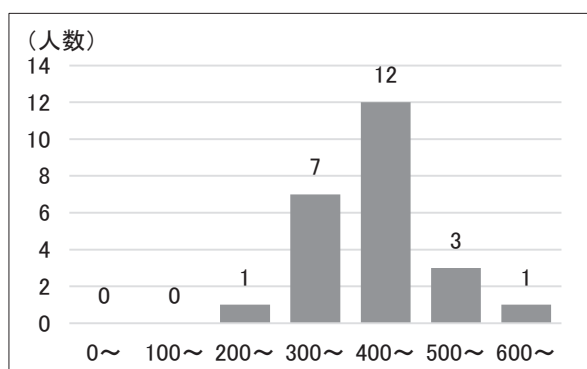
キーボードの位置を覚え、正しく入力するタッチタイピングの習熟度は上がっていても、日本語

変換を伴う入力スキルに関しては、個人の日本語力に大きく影響を受けると感じている。

本稿では、統計的な手法ではなくデータの単純分析による考察に終始してしまった。今後は成績や検定合格状況などとの相関も確認し、学生のレベルに合わせたきめ細やかな指導法を追究していきたい。

参考資料

- 1) 三好善彦, 小堺光芳: コンピュータリテラシー教育におけるタイピング速度向上に関する考察, 埼玉女子短期大学研究紀要, 41, 1~12 (2020)
- 2) 森大樹, 広瀬勝則: タッチタイピング教育の考察～スマートフォン普及によるパソコン文字入力速度への影響～, 大阪千代田短期大学紀要, 48, 82~95(2018)
- 3) 甲賀崇史, 大内里紗: 保育系短期大学生におけるタッチタイピング練習の有効性, 湘北紀要, 38, 115~123 (2017)



図表8 入力テスト結果 (n=24)